OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	第3章　フィリピンにルーツを持つ子どもの「つながり」の活用
Author(s)	矢元, 貴美
Citation	阪大ふくふくセンター 研究・実践シリーズ 1　日本のなかの東南アジア ： 移民第2世代に注目して. 2026, p. 49-64
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/104099
rights	This article is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-NoDerivatives 4.0 International License.
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

第3章　フィリピンにルーツを持つ子どもの「つながり」の活用

矢元　貴美

I.　はじめに

本稿の目的は，フィリピンにルーツを持つ子どもたち，とりわけ第2世代や第1.5世代が，フィリピンと日本という両方の背景や経験を踏まえ，フィリピンや日本とのつながりをどのように活用しているかを明らかにした上で，彼らがその選択をした要因として日本側の認識がどのように関わっているかを検討することである。彼らが日本の学校や社会をどのように捉え，彼らの背景や経験，フィリピンや日本とのつながりをどのように活用して生きていこうとしているかに着目する。

フィリピンにルーツを持つ子どもたちが，つながりをどのように活用しているかに関連する研究には次のようなものがある。三浦［2015］では，エスニック教会や学習教室において，ネットワークが構築され，子どもたちがフィリピンのことも日本のことも資源として身につけていくことが描かれている。子どもたちが複数の選択肢を持つことは，徳永［2008］，Tokunaga［2011］，高畑・原［2014］，矢元［2013; 2016］の研究でも指摘されている。離島で暮らす第2世代の若者たちについて，野入［2016］では，フィリピンにルーツを持つことを戦略的に用いつつも，資源化することが難しい状況が，矢元［2019］では，フィリピンとのつながりを持っていたとしても進路選択への影響は限られていることが述べられている。

日本で暮らす彼らの移動の経験，滞日期間，言語運用能力，学習歴，保護者の背景や親族との関係は多様である。フィリピンにルーツを持つ子ども同士でのつながりや，フィリピンコミュニティでのつながりを保持・活用する子どもたちに関する事例・研究を踏まえつつ，つながりを活用したいができない，またはつながりたくないと考える子どもたちにも目を向け，その要因を検討する必要があると考える。

II. 在日フィリピン人・フィリピンにルーツを持つ子どもの背景と数

本節ではまず，日本で暮らすフィリピン人，とりわけフィリピンにルーツを持つ子どもたちが増加した歴史的背景や人口的な特徴を把握する。

フィリピンで労働省の下に海外雇用庁が設置され，海外就労が奨励されるようになったことや，日本の好景気などを背景として，1980 年代以降，在日フィリピン人が増加した。法務省の在留外国人統計［法務省 2024b］に基づくと，図 1 に示すように，多少の増減は見られるものの，その後も現在に至るまで増え続けており，2024 年 12 月末時点では，中長期で日本に在留している外国人 376 万 8,977 人のうち，フィリピン国籍者は 34 万 1,518 人（特別永住者 50 人を含む）である。男女別では男性 11 万 8,137 人, 女性 22 万 3,381 人で，65％強を女性が占める。39 歳までの子どもや若年層では男女比はほぼ同数であるが，40 代以上では，女性の数が男性の 2.5 倍以上となり，10 倍を超える年代もある（図 2）。最多年齢層は女性が 50 代，男性は 30 代であり，35 歳以上から男女比の偏りが拡大する。

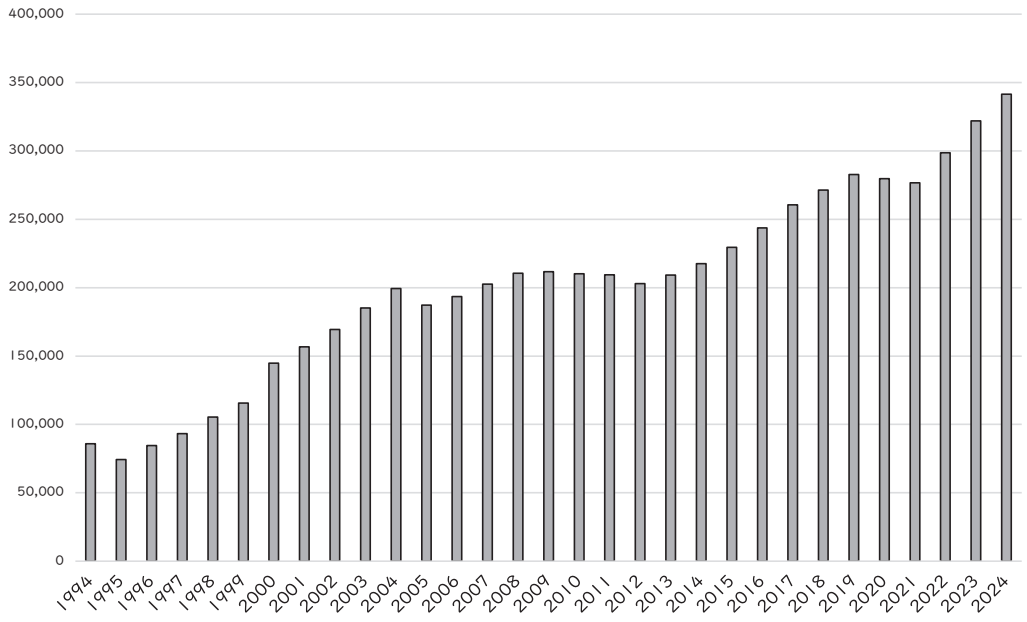


図 1　フィリピン国籍者数の推移（1994 ～ 2024 年）

（法務省「在留外国人統計（旧登録外国人統計）」を基に筆者作成）

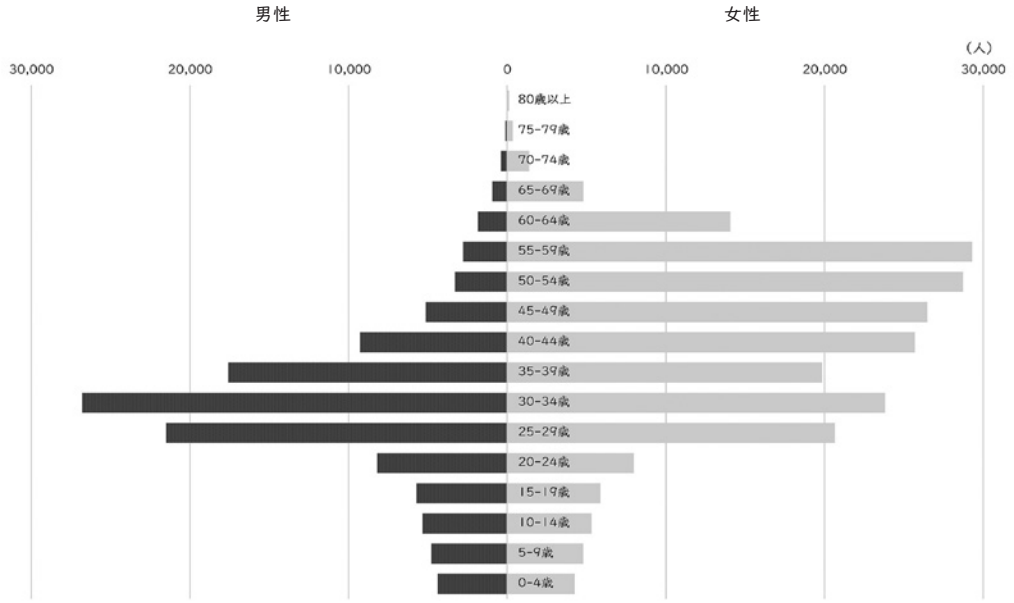


図2　在日フィリピン人の年齢構成（2024年）

（法務省「在留外国人統計（旧登録外国人統計）」を基に筆者作成）

フィリピン国籍者の2024年12月末時点での主な在留資格は，永住14万1,798人，定住6万2,458人，技能実習4万700人，日本人の配偶者等2万6,300人，特定技能2万8,234人，技術・人文知識・国際業務1万552人，永住者の配偶者等9,302人である。近年，活動に基づく在留資格（就労資格）である技能実習，特定技能，技術・人文知識・国際業務が増加傾向にあるものの，依然として永住，定住，日本人の配偶者等，永住者の配偶者等といった，身分又は地位に基づく在留資格（居住資格）を持つ人が7割強を占め，定住性が高い。このような定住層に含まれるのは結婚移民と日系人である。都道府県別では，多い順に，愛知，東京，神奈川，埼玉，千葉，静岡，岐阜，大阪，茨城，広島にそれぞれ1万人以上が暮らしており，都市部に多く居住していることは他の国籍・出身者と似ているものの，山村や離島といった，外国人人口が少ない場所にも暮らしているという特徴が見られる。在日フィリピン人の人口的特徴［高畑 2011: 222］をまとめると，①女性が多い，②日本人との結婚が多い，③第2世代の存在，④定住する傾向が高い，⑤（一部を除き）分散居住である，ことである。

1980年代から増えたフィリピン人の多くは「興行」の在留資格で来日した20代を中心とする女性たちであった。それに伴い，彼女たちと日本人男性との結婚が1992年から2006年にかけて増加し，親がフィリピン国籍者である子どもの出生数も増加した。フィ

リピン人女性と日本人男性との婚姻件数は 1990 年代に年間 5 千組を超え，最多となった 2006 年には 1 万 2 千組あまりであった。2024 年の婚姻件数では，女性が外国籍の夫妻の総数 1 万 1,517 のうち 2,460（約 21％），離婚件数では，女性が外国籍の夫妻の総数 5,565 のうち 1,567（約 28％）が妻の国籍がフィリピンである［厚生労働省 2023］。2005 年に「興行」の在留資格の審査基準が厳格化された後，来日する女性は減少した。現在，フィリピン出身の在留者に多い 40 代以上の女性の多数が，かつて「興行」の在留資格で来日し，日本で配偶者を得た人たちだと思われる。

1990 年代半ばからは，日本人男性と結婚（主に再婚）した母親に呼び寄せられ来日する子ども（前夫の子）や，母親と長く離れてフィリピンで暮らした後に呼び寄せられた子どもが増えた。戦前から戦後にかけて日本人移民とフィリピン人女性との間に生まれた日系 2 世を対象に，国籍を回復し戸籍を作る就籍の支援が始まったこともあり，改正入管法（1990 年）のもとで日系の 3 世などが来日することも増え，日系 4 世・5 世も誕生している。さらに 2009 年の国籍法改正により，日比婚外子の来日や定住も増えている。

在日フィリピン人のうち 20 歳未満は 40,434 人で，総数の約 1 割を占める。2025 年 7 月 1 日時点での非正規滞在のフィリピン人 4,575 人［法務省 2024a］にも子どもが含まれている可能性がある。日本国籍の親とフィリピン国籍の親の間に生まれた子どもは過去 20 年間に約 5 万 5 千（55,302）人おり，日本国籍の親と外国籍の親のもとに生まれた子ども（388,518 人）の約 14.2% を占める。外国籍の両親の間に生まれた子どものうち，両方または一方の親がフィリピン国籍である者は同期間に約 1 万 7 千（17,785）人であり，外国籍の両親のもとに生まれた子ども（263,688 人）の約 6.7% を占める［厚生労働省 2023］。父母の両方または一方がフィリピン国籍である子どもの 1 年間の出生数は 20 年間で 4 割程度減り，特に父親が日本国籍で母親がフィリピン国籍の子どもは約 4 分の 1 程度に減少した。逆に母親が日本国籍で父親がフィリピン国籍の子どもは約 3.0 倍に，両親ともフィリピン国籍の子どもは約 8.6 倍と増加した（図 3）。

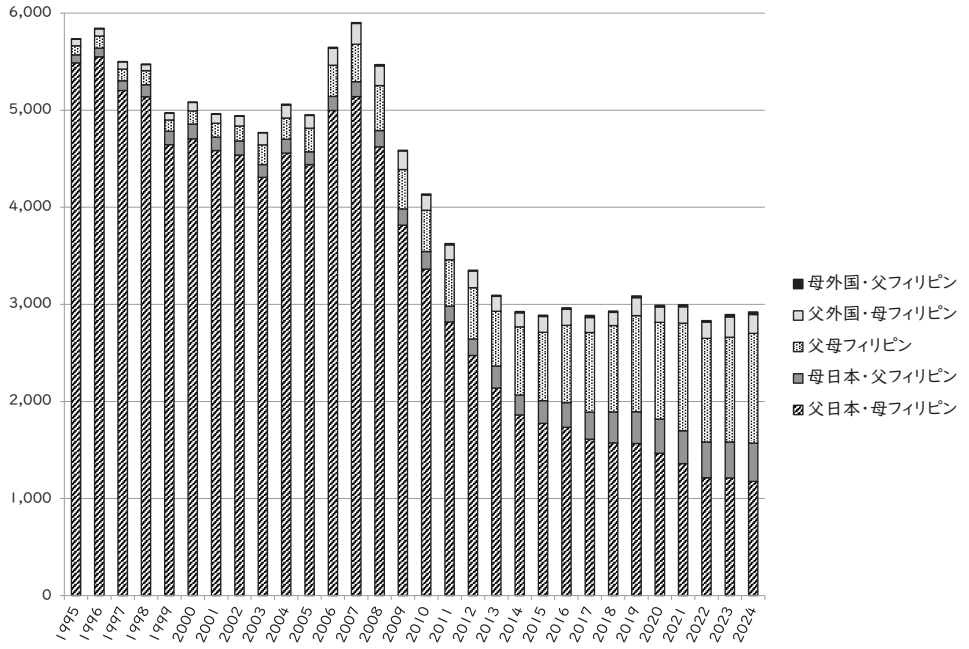


図 3　親がフィリピン国籍者である子どもの出生数（1995 ～ 2024 年）

（厚生労働省「人口動態統計」を基に筆者作成）

フィリピン人学校は愛知県に 1 つのみで，日本の学校へ入る前の準備をするという面が大きく，フィリピンにルーツを持つ子どもたちは大半が公立学校に通っている。外国籍児童生徒の国籍別統計は公表されていないため，フィリピン国籍の在籍者数は明確には分からない。2023 年度「日本語指導が必要な児童生徒」の外国籍の者のうち 8,913 人（15.4%），日本国籍の者のうち 2,208 人（19.4%），全体の 16% はフィリピン語を母語または第一言語とする児童生徒である［文部科学省 2024］（図 4）。この子どもたちが日本で暮らしている背景としては，①母親の再婚に伴い呼び寄せられた，②両親は長く日本で暮らしていたが，子どもはフィリピンで育てられ，ある程度の年齢になって呼び寄せられた，③日本人の父親と，母子は日本とフィリピンとで離れて暮らしており，その後呼び寄せられた，④フィリピン人夫妻の子どもで，親の仕事の都合や一家移住などで来日した，などが考えられる。

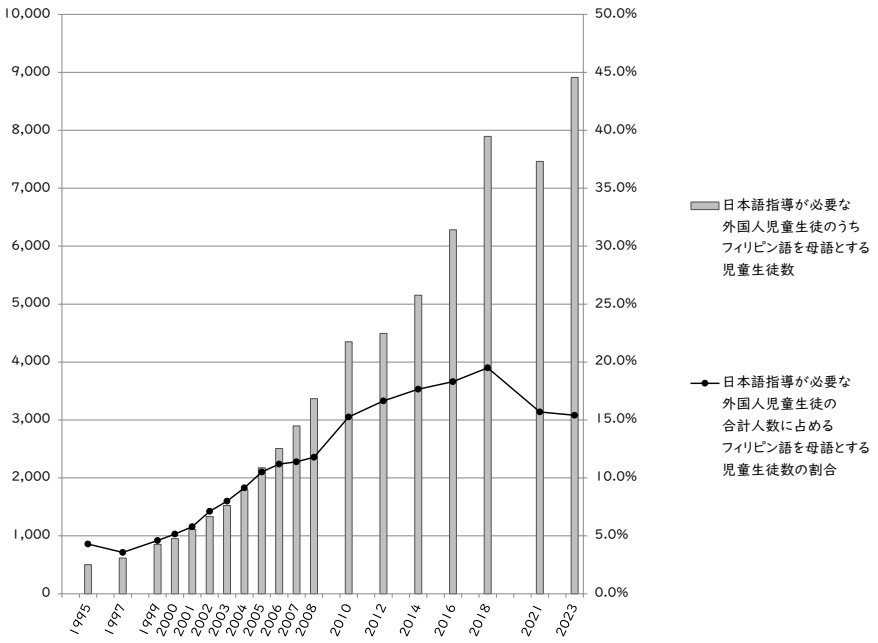


図 4　日本語指導が必要な外国人児童生徒のうち母語がフィリピン語である児童生徒数（1995 ～ 2023 年度）

（文部科学省「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査」を基に筆者作成）

III.　研究方法と対象

本稿における研究方法は，インタビュー調査，参与観察，SNS での情報収集である。本稿のために調査したものではなく，これまでに報告者が携わってきた，フィリピンにルーツを持つ子どもの教育にかかわる調査，および，フィリピン人結婚移民女性の高齢化に関する調査の一部を組み合わせて利用している。

対象者は，フィリピンにルーツを持つ第 1.5 世代・第 2 世代，一部第 3 世代の 10 代後半から 20 代の若者，フィリピンにルーツを持つ子どもを持つフィリピン出身の女性，母語・継承語教育に携わる支援者，である。インタビューと参与観察の期間は，2011 年～ 2023 年，インタビューにおける使用言語は，フィリピン語，日本語，英語である。参与観察の場所は，報告者が講師として携わっていた，公立学校の母語・継承語の授業およびその他の学校内外での活動である。

IV. データと分析

本節では，フィリピンにルーツを持つ子どもたちが日本やフィリピンとのつながりをどのように活用しているか，もしくはしていないかを，実際の語りを引用しながら，①進路選択，②仲間作り，③家庭内での葛藤，の3点から読み解いてみたい。なお，対象者の年齢，および職業または立場はインタビュー時のもの，（　　）内は文意が通りやすくするための補足である。

1. 進路選択

子どもたちが進学や就職といった進路を選択する場合には，本人の希望や戦略とともに，言語の運用能力とそれに伴う学力，受け入れ側の高校や大学の制度や環境などによって，つながりが活用できるかどうかが大きく変わってくる。

以下の2名は学齢期途中に日比間で複数回の移動を経験しており，2名とも父親が日本人で母親がフィリピン人である。I氏は英語の運用能力を活かして日本で高校へ進学した後，日本の大学とフィリピンの大学のそれぞれの良さを見極めた上で，日本での進学を勧めた教師の助言には従わず，母方の親族が暮らすフィリピンの大学を選んだ。S氏は特別枠の入学試験を経て日本の高校で学んだ後，フィリピンと日本のどちらで進学するかを考えた上で日本の短大へ進んだ。語りはそれぞれインタビュー時のものであり，大学・短大を卒業後，I氏は日本に戻り日本で，S氏は妹たちが暮らすフィリピンで働いている。

> （見学した日本の大学の）授業は良かったんです。テクニカルな面では日本の方が優れていると思うんですよね。でも，それを伝える伝え方とか，プレゼン力では，英語でできるというか，その仕方はやっぱりフィリピンの方が良かったかな。（中略）日本に戻るか，アメリカで大学に行くか，フィリピンで仕事ができるか，決まったのはあまりないです。
>
> ［10代，大学生，男性，I氏］

> 短大に受からなかったらフィリピンで大学行くつもりだったけど，受かったから日本にする。（中略）日本で働くしかないじゃん。フィリピンで働いたら，お金なんもならんし。（中略）日本やったら，私，何ができるかなと思って，英語に関係ある

仕事じゃないかなと思って。（中略）フィリピンで働くことになったら，日本語もできるし，その関係で働けばいいんじゃないかなって思って。

［10 代，高校生，女性，S 氏］

次の 2 名は日本生まれ日本育ちで国際系学部に進学した大学生である。P 氏は中学生の頃までは母親がフィリピン人であることを否定的に考えていたといい，Y 氏はフィリピン語や英語の運用能力が高くはなかったという。しかし，母方の親族との交流は保持しており，フィリピンにルーツを持つことを活用できると考えた進学先を選択している。この 2 名によると，フィリピン人の母親を持つ日本国籍の人には，フィリピン語が話せず，フィリピンに対して関心がなく否定的な人が多いといい，自分の周りでフィリピンに興味があるという人は自分くらいしかいないということであった。

母親がフィリピン人であることをすごく否定していた。日本人になりたかったし。でも逆にそれを自分の強みにして大学に行ったら，きっと私，人生変わるんじゃないかと思ったのが高校生の時で。母親がフィリピン人じゃなかったら，たぶん大学も，今のところに行かなかったと思う。

［20 代，大学生，女性，P 氏］

「国際」のも見てみたら，自分の中にあった何かがすごく湧いてきて，ああ，やりたいなって思って。そういうところで，やっぱりハーフで，つながりがあるんだなって思いました。（中略）英語も全然できないですし，全く無縁だったんですけど。

［20 代，大学生，女性，Y 氏］

学齢期途中で移動した人の場合，日本語の運用能力とそれに関わる学力向上が妨げられることにより，日本での進学を希望したり，日本で進学すると決めていたりしていても，自分が希望する学部や専攻を選択できない人も多い。周りから，言語運用能力を活用した進路選択を勧められても，「活用できるか」と「活用したいか」が一致せず，それが本人の希望等に合わないこともある。

以下の若者 3 名のうち，女性 2 名は両親ともにフィリピン人，男性は父親が日本人で母親がフィリピン人であり，3 名とも学齢期途中に日本へ移動してきた。J 氏は日本での進学

を諦めざるを得ず，母親とともにフィリピンへ帰国した。R氏は看護師になりたいと願いながらも叶わず，教師に勧められた国際系の大学に合格して進学したが，インタビュー時は進路に悩んで休学中であった。C氏も国際系の大学への進学も考えたものの，自分には合わないと判断し，教師や母親を説得して飛行機の整備士を養成する専門学校への進学を選択した。フィリピンにルーツを持つ子どもの母親であり，介護施設で働いているL氏は，どんなに努力して日本語を身につけたとしても，言葉の壁は存在し続け，子どもたちの職業選択の際にも問題として扱われるという考えを語っている。

大学まで（日本で）続ける予定でしたが，一度フィリピンに戻って長く経って，（以前身につけた日本語を）たくさん忘れてしまったので，自分の日本語能力を考えると高校に入るのが難しいことが分かりました。（中略）先生が両親に，日本で暮らし続けるのならインターナショナルスクールに通うのが良いとアドバイスしました。でも，とてもお金がかかるので，フィリピンへ帰るのが良いと決めたのです。

［20代，大学生，女性，J氏］

小学校の時はずっとアメリカで看護師になりたいって思ってたんですけど，･･･日本に来たら勉強が分からないし，もうアメリカで看護師するのは無理かなって諦めて。（中略）看護師はほんとすごくなりたいって意志があったんですけど，高校の初めのうちは通訳かな。通訳から看護師にまた変わって。（中略）それから先生に，医者目指したらって（言われて）。（中略）浪人を2～3年くらいして，医者を目指そうかなって思ってたんです。（中略）（進学した大学に）合格したら私行きたいって思うように（なって）。なんかもう疲れたっていうか･･･。

［20代，大学生，女性，R氏］

時間が経つほど，不安になってきたっていう感じで。（中略）その後何をすればいいのってことを何回も考えたことあって。通訳は自分でも向いてないと分かってますから。英語の先生になるのもイヤで，何すればいいんかなって思ったんです。（中略）（先生には）大学行けって言われました。で，先生にも，大学はやめて専門学校にしますって（伝えた）。（中略）英語も喋れるのに，3か国語喋れるのに，勿体ないんじゃないかって言われて。いろんな人（＝先生）に反対されました。

［10 代，高校生，男性，C 氏］

今の日本ではフィリピン人も日本人も同じ職場で働いていて平等です。でも，日本人はフィリピン語が分かりません。だから日本人はイライラするんです。（中略）いくら私たちは日本語がうまくなっても，そこに言葉の壁があるんです。変わらないです。例えば，フィリピン人とのハーフの子どもたちは大丈夫だと思いますが，そうじゃないと（介護職は）難しいと思います。

［50 代，母親，L 氏］

以上の語りから，子どもたちはつながりが活用できない状況で葛藤するのみならず，活用できる状況にあっても，戦略的につながりを活用することもあれば，つながりを活用するのが得策ではないと考えて避けることもあり，そこにも希望とのズレや選択肢の間での葛藤が見られる。

2. 仲間作り

仲間作りについては，同じフィリピンをルーツに持つ子どもたち同士でのつながりが積極的に促される場と，そうではなく，むしろそれが阻害される場とが見られる。

特に，仲間作りがその目的の 1 つとされている母語・継承語の授業では，その授業および他校との交流会等を通して，同じルーツの仲間とつながりを作ることや保つことができ，その授業を受けている子どもたちや支援者からは，つながりによる利点が語られている。

（母語・継承語の授業は）とても楽しいです。全員フィリピン人だからお互いに理解できます。コミュニケーションもよく取れるし，勉強もしっかりします。みんながいて自分は幸運だと思います。

［10 代，高校生，男性，D 氏］

授業だけじゃなくて，ダンスとかあったりするじゃないですか。それでいろんな人と関われる機会があるっていうのがいいよね。（中略）いろんな学校のフィリピン人同士とかでも友だちになれるし，いい。

［10 代，高校生，男性，T 氏］

卒業生はすごいネットワークをみんな作る。まず，（卒業生同士で）結婚してる子が多い。（中略）一人の（＝未婚や離婚した）子も，ほんと孤立してなくて，優しくて，一緒に飲みに行ったり，ホームパーティとかに，みんなで集まったり，パートナー同士も仲良いんですよ。（中略）一時的に仲悪い時って，同じ言語だから余計に，言語が一緒だからこそ，喧嘩することもあると思うんですね。でも，孤立してなさみたいなのが見える時があって，それがほんとにすごいな，と。

［50代，支援者，K氏］

一方，母語・継承語の授業等でフィリピンにルーツを持つ子ども同士が共に過ごす場が身近に存在しない場合はもちろんのこと，支援者からは，そのような場が設けられている場合であっても，それ以外では同じルーツの仲間と過ごすことを望まない子どもたちもいるということが語られている。両親の国籍や本人の移動の時期に関係なく，教室内で同じルーツの仲間と距離を置こうとする子どももいる。

娘たちはたとえば，私のフィリピン人の友だちで同じ年代の子どもたちとは友だちにならない。ハーフの子どもたちとは友だちにならない。特に上の娘は小さい頃から友だちは日本人ばかり。（ハーフの友だちを作ろうとしないのは）イヤだから。

［40代，母親，N氏］

同じ国の人同士で交流を持ちたいっていう人もいるけど，ほとんどの人が，噂話がイヤだから，関わりを持ちたくない。（中略）フィリピンの人同士で何かしよう，みたいなのはあまり乗り気ではない。その時楽しいのはいいけど，定期的にとかは（望まない）。だから他の学校との交流とかも，そんなに乗り気ではない。（中略）小学校3年で来た（ある）子は，そこまで友だちを作りたいとは思っていない。「心を打ち明けられる友だちはいない」って言うから，「じゃあ交流会とか行く？」って言ったら，「別に」みたいな。（中略）でも，交流会に行ったりとか，顔合わせてしゃべったら，「すごい良い子がいたよ」とか，「日本の子より楽しかった」とかっていうのは言う。

［40代，支援者，E氏］

M さんはフィリピンダンスについて不満を述べたらしい。（中略）他の生徒は相手にしておらず，M さんは離れて座っていた。耳にイヤホンを付けて，他の生徒の会話にも入らなかった。

［母語・継承語の授業，フィールドノーツ 2015/2/4］

G さんが授業に来たくない理由は人間関係でいろいろあるからしい。（中略）「ダンスうまいやん」とか「できるよ」と他の生徒が言ってくれるが，それでもやりたくなさそうである。先生（＝フィリピン人講師）に「フィリピン人なんだから一緒にやるよ！仲良くして！」と言われる。

［母語・継承語の授業，フィールドノーツ 2018/1/24，2018/4/11］

母親の中にも，フィリピンコミュニティが身近に存在する状況において，家族に反対されているわけでもなく，望めば参加する機会に手が届くといった場合であっても，フィリピン人の集まりには積極的に参加しない，または，フィリピン人同士で付き合うことは避けていると語る人が少なからずいる。揉め事や噂話に巻き込まれたくない，ということが理由としてよく挙げられており，そういった親の姿勢が子ども同士のつながりにも影響している可能性がある。

3. 家庭内での葛藤

家庭によって異なるものの，特に父親が日本人である場合，フィリピン語を使わない，フィリピンにルーツを持つ人たちと付き合わない，といった，ルーツが否定されることや避けられることがある。それによる影響として，フィリピン人の母親が抱える葛藤および母子間でのコミュニケーションの難しさが語られている。

子どもたちがタガログ語を教えてほしくないと言いました。フィリピン人の集まりにも一緒に連れて行っていません。お父さん（＝夫）が嫌がったんです。

［60 代，母親，B 氏］

子どもが学校に通うようになると忙しいので，私はもうフィリピンの文化を子どもに教えることはできませんでした。姑は私に対して，子どもたちが混乱するから

子どもたちにはタガログ語を教えないでくれ，と言いました。（中略）子どもたちには日本語とタガログ語を混ぜて話していました。（中略）でも，彼らは私が（タガログ語で）言っていることの意味が分かりません。私の顔の表情からしか分かりません。

［50代，母親，H氏］

一方，子どもの年齢が上がるにつれて，フィリピン語を学ぶことに関心を示し始め，拒絶していたフィリピン人の母親を受け入れ始めるといったことも観察されている。母語・継承語の授業といった場が提供されたことによって変わったという事例も見られる。

今になって（子どもたちは）私を責めています。なぜ私が無理にでも教えなかったのか，なぜ諦めてしまったのか，少なくともタガログ語を教えてくれたら良かったのにと。私は頑張ったのですが，当時子どもたちは嫌がっていたので諦めてしまったんです。（中略）（子どもたちは）お母さんがフィリピン人だということを学校では知られたくなかったのです。自分の顔は日本に近いから良かったと言ったのです。私はびっくりしました。なぜフィリピン人であることを恥ずかしがるのかと言って，喧嘩しました。

［50代，母親，A氏］

（ある女子生徒のフィリピン人の）お母さんが「一緒に歩いてくれないんです」って言ってたけど，すごいんです，フィリピン語を勉強し始めて，歩いてくれるようになったんですよ。「なんてしゃべっていいか分からなかった」って。（中略）（親族の葬儀のため）フィリピンに帰ったんですよ，1か月くらい。その時に，いっぱい話せたんですよ，学校で習ってるから。（日本に）戻ってきて，フィリピンが大好きになったんです。（中略）お母さんが「一緒に歩いてくれるようになった」って。

［50代，支援者，K氏］

（女子生徒は）前はフィリピン語で話すのが，周りの目も気になって恥ずかしかったが，今はもう恥ずかしくないということである。どんどん勉強したいという意欲がある。「お母さんは教えられないから，高校で勉強して」と言われているそうだ。

［母語・継承語の授業，フィールドノーツ 2015/4/15］

家庭内における，親子間での価値観の相違や，親と子それぞれの葛藤は，日比の国際結婚家庭において見られることが多いものの，両親ともフィリピン国籍である家庭で育つ子どもであっても，親とフィリピン語で話すことを避ける，親と距離を置こうとする，といったことが観察されている。

V. 考察

以上の分析より，人によって異なる場合もあれば，1 人の人でも，時，環境，場面等によって，また，成長段階によって，つながりをどのように活用するかが異なることもあるが，大まかにまとめると，つながりの活用について以下の 3 点の類型が明らかとなった。

1 点目は，日本とのつながりとフィリピンとのつながりを同程度に活用していると考えられるケースである。進路選択の事例で見たような，フィリピンと日本との両方を客観視し，両方を活用しているものや，日本で暮らすフィリピンにルーツを持つ子ども同士でのコミュニケーションを維持しているといったものである。

2 点目は，日本とのつながりよりもフィリピンとのつながりの方を活用しているケースである。積極的にフィリピンとのつながりを活用して進学したり，フィリピンで働くことを選択したりする場合と，日本のルーツも持つことや，日本での生活経験の利点は否定しないが，日本に気持ちは向かないといったものである。

3 点目は，フィリピンとのつながりよりも日本とのつながりの方を活用しているケースである。たとえそれを重要な他者に勧められたとしても，フィリピンとのつながりは活用せずに進路を選んだり，フィリピンには関心を抱かなかったり，フィリピンにルーツを持つ人と距離を置いたりするものである。

フィリピンにルーツを持つ子どもたちがそのような選択をした要因として日本側の認識がどのように関わっているのであろうか。彼らがフィリピンの言語を保持・向上させる動機は全体的に高くはなく，フィリピンに関わる人間関係の保持・形成については彼らの間で相違が見られる。フィリピンで暮らす親族との関係や日本で同じフィリピンにルーツを持つ者とのつながりを持っているか否か，ルーツを日本で「売り」にするか，生活拠点としてどの国を選ぶのかには，保護者の方針や態度のほか，日本の学校や社会における彼らへのまなざしが影響を与えていると考えられる。

1 点目は，日本社会のフィリピン，またはフィリピン人に対する見方の厳しさである。

これが保護者の子育てや教育戦略に影響を及ぼし，子どもにもそれが伝わり，日本とのつながりの方を活用する，または，そうせざるを得ない状況を生み出している。ここには，家庭内における，日本人の父親や祖父母の影響も含まれる。

2 点目は，学校での外国にルーツを持つ子どもや保護者に対する見方の厳しさである。どのように見られているかを，特にまず子どもが感じ取り，それが保護者にも伝わり，子どもたちのつながりの活用法の選択に影響を及ぼしている。

ただし，対象者の語り等のデータに基づくと，学校等におけるフィリピンを肯定的に捉えられる機会の提供や，子どもたちがフィリピンにルーツを持つことを肯定的に捉えていることを示すことによって，子どもたち自身の意識が変化する可能性が見いだせる。日本とフィリピンとのつながりをバランス良く活用している事例からは，フィリピンという国や社会の現状を客観的に見ることができるようにすることも重要であると考えられ，子どもたちがつながりを自由に積極的に選択できるようになる環境を整える必要があると言える。

対象者の子どもたちは，その後社会人となり，国を超えた移動を経験している人，転職を経験した人，家庭を持った人もいることから，その後の様々な選択において，つながりをどのように活用しているのかについても，今後追いかけていきたい。

付記・謝辞

本稿は，筆者の博士論文，科学研究費助成事業（若手研究 20K13105）「フィリピンにルーツを持つ子どもを対象とした母語･継承語教育の実態と教材開発」（研究代表者：矢元貴美），科学研究費助成事業（基盤研究（C）21K01862）「日本における結婚移民女性の高齢化―フィリピン人を中心に」（研究代表者：高畑幸，研究分担者：辻本登志子・原めぐみ・矢元貴美）の成果の一部を再構成したものです。インタビュー調査にご協力いただいた方々，基盤研究（C）21K01862 のアドバイザーの齋藤ネリサさんと，コーディネーターの進マリアさんと園崎寿子さん，および，東南アジア学会第 106 回研究大会シンポジウムの登壇者とコメントをいただいた方々に感謝申し上げます。

参考文献

三浦綾希子．2015.『ニューカマーの子どもと移民コミュニティ：第二世代のエスニックアイデンティティ』勁草書房 .

野入直美．2016.「沖縄･先島諸島で暮らすフィリピン人女性たちの生活世界：ネットワーク，

リーダーシップと次世代継承を中心に」『移民研究』11: 7-36.

高畑幸．2011.「在日フィリピン人社会の現状分析：第一世代の加齢・高齢化と新日系人の流入を中心に」『部落解放研究』17: 67-83.

高畑幸･原めぐみ．2014.「在日フィリピン人の 1.5 世代:日本は定住地か, それとも通過点か」『国際関係・比較文化研究』13(1): 21-39.

徳永智子．2008.「『フィリピン系ニューカマー』生徒の進路意識と将来展望:『重要な他者』と『来日経緯』に着目して」『異文化間教育』28: 87-99.

Tokunaga, Tomoko. 2011. "'I'm Not Going to Be in Japan Forever': How Filipina Immigrant Youth in Japan Construct the Meaning of 'Home'". *Ethnography and Education* 2: 179-193.

矢元貴美．2013.「学校生活におけるフィリピン人の親を持つ子どもたちの困難と喜び：日比両国の学校生活を経験した子どもたちの視点から」『グローバル人間学紀要』6: 5-26.

矢元貴美．2016.「フィリピンにルーツを持つ子どもの大学・短期大学への進学理由：日本で高等学校を卒業した人たちの事例から」『移民政策研究』8: 89-106.

矢元貴美．2019.「徳之島に暮らすフィリピン人女性の子どもたちの進路とフィリピン文化の継承（特集 島嶼への結婚移住をめぐる比較研究：フィリピン人を中心に）」『移民研究』15: 3-14.

統　計

法務省．2024a.「本邦における不法残留者数について」2025 年 12 月 2 日アクセス．https://www.moj.go.jp/isa/publications/press/13_00058.html

法務省．2024b.「在留外国人統計」2026 年 1 月 15 日アクセス．政府の統計窓口 https://www.e-stat.go.jp/

厚生労働省．2023.「人口動態統計」2026 年 1 月 15 日アクセス．政府の統計窓口 https://www.e-stat.go.jp/

文部科学省．2024.「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査」2025 年 12 月 2 日アクセス．政府の統計窓口 https://www.e-stat.go.jp/